Milk and Shiranuka

M&S

町内最大級のメガファーム

牛乳の年間生産量が1,000㌧を超える大規模牧場はメガファームと称され、その10倍規模となる10万㌧の巨大牧場は「ギガファーム」と呼ばれています。
※明確な基準が定められているわけではありません。

M＆Sの施設や機械は、畜産クラスター事業の一環で整備され、総事業費は約20億円。このうち約６億円は国、約５千万円は町の補助金を活用しています。

町内の酪農家４戸による共同経営牧場、株式会社M＆S（茶路、澁谷博代表取締役）が、今年の４月から稼働しています。

今月号では、M＆Sの澁谷博代表と釧路丹頂農業協同組合営農部白糠営農課の手塚裕明課長にお話しを聞きました。

――M＆Sは澁谷代表と五十嵐政敏さん、工藤宏昌さん、田口祐輔さんによる共同経営となっていますが、なぜ共同経営をすることにしたのでしょうか。

澁谷代表　これから先を見据えたときに、担い手不足や牛乳生産量の減少など、町の酪農が衰退してしまうことに危機感を持つようになりました。それで、同じような考えを持つ酪農家たちと協力して、会社を設立することにしたのです。

――M＆Sは、町内で最大級の規模となっています。この規模で経営することに、どのようなメリットがあるのでしょうか。

澁谷代表　牛をたくさん飼養するということは、それだけ生乳の生産量が増えるということになります。今回、搾乳ロボットを6台導入し、24時間体制で搾乳しています。大規模経営の方がコストは小さく、効率よく生産できるのです。また、機械化により労働力の負担も軽減されました。機械化をするにしても個人でやるには限界があります。

手塚課長　会社経営になったことで、後継者問題も解決されています。

――搾乳ロボットでは、どれくらいの量を生産できるのでしょうか。

澁谷代表　今は1日10㌧から11㌧、年間だと3500から3600㌧くらいを生産しています。

生まれてから２年くらいで母牛となり、乳が出るようになります。オス牛が生まれた場合は、生後10日程で売ることになります。

澁谷博代表

昭和３４年２月22日生まれ（62歳）
白糠高校卒業後、父親の後を継いで澁谷牧場を経営。
趣味は読書。両親と妻の幸子さん、息子２人と暮らしています。

これまでは牛を牛舎に繋ぎとめて飼養する方法でしたが、M＆Sではフルーストール式という放し飼いに近い状態で飼養しています。そのことにより牛のストレス軽減にもつながっています。

手塚課長　目標は年間４０００㌧の生産量です。1日12㌧くらいですね。それくらいは生産できると思っています。

澁谷代表　搾乳ロボット1台あたり60頭を搾乳することができます。現在、ここで飼養している牛は３２０から３３０頭です。生産量を増やすためには、頭数を増やさなければならないので、今すぐにということではありませんが、将来的には新たな施設を整備することも考えています。

――機械化を図ってはいますが、施設を拡大するとなると、労働力は足りるのでしょうか。

澁谷代表　今、職員は８人いますが、現状であれば十分足りています。どの程度規模を拡大するかにもよりますが、その規模に見合った人員は確保していかなければならないと思っています。

「M&Sの一番の特長はオートメーション化。新たな酪農のスタイル」と話す澁谷代表。

「牛はおとなしい生き物。コミュニケーションがとれることもある」と話す手塚課長

――M＆Sでは、どのような仕事があるのでしょうか。

澁谷代表　まずは、搾乳ロボットに入っていない牛がいないかを確認します。搾乳ロボットを見れば、どの牛が搾乳していないかが分かります。その牛をロボットに入れてやるというのが、主な作業になります。大きな作業といえばその程度です。

手塚課長　はじめの頃は牛も人